

## 教材の価値を見据える

中島 義夫

### 一、基調報告にかえて

文科省は「言語活動の充実」を推し進めているが、言語活動が重要なのは、今に限ったことではなく以前からも同じである。過去の実践にもしっかりと足跡があり今後も受け継ぐ必要がある。では、体育科における言語活動とは何か。

体育では、「できた」ことが重要視されるのは言うまでもない。しかしそれが、どのようにしてできたのか。どうやればできるのか。コツは何なのかなどを、自分の言葉で表現させることを大切にすべきである。それは「わかる」こととされ、本能的に「できた」ことと分けている。「わかる」ことは科学的・理論的に学ぶことで「学習」になり得る。体育は「練習」ではない。子ども達が「わかる」ためにノート等に記録し、考えをまとめ、さらに、グループ学習の中や、出来ない子に「わかるように教える」（伝承する）ことで表現力は養われていく。教

師の笛のもとで、何も考えることなく「やらされる体育」や「能力別学習」「めあて学習」では、「わかる・教え合う」力はつかない。本当の意味で、「誰もがわかって、できる。そして教え合う」体育授業を構成し実践していくこと。そのためにどんな教材でどんな事を学ばせていくことが大切かをしっかりと吟味研究していくことを忘れたくない。

（中標津東小学校 中島 義夫）

### 二、実践レポートに学ぶ

1 「生徒が豊かにかかわり、自ら高め合うことを  
目指した授業実践の一例」

～バスケットボールを題材に～

枝幸町立枝幸中学校 水嶋 星陽

#### 1, 本単元で目指したもの

- ・ 人間関係づくり（関心・意欲・態度）
  - ・ チーム力向上を目指し、自チームを振り返り課題解決を図る（思考・判断・表現）
- 基礎的・基本的技能の向上（技能）
- 技能の名称やルール、効果的な運動の行い方への理解（知識・

理解)

## 2. 解決のための手立て

(態度) ーどんな時もチームで

学習を進めていく。

「できる」(技能)

(思考) どうしたら良いか？

「わかる」(知識) 自分たちに足りないものは

## 3. 単元の進め方(全9時間)

前半に基礎的基本的技能の習得

後半は、攻撃有利のゲームと課題解決のための練習

最後にシミュレーション (毎時間のパターン)

## 4. 8/9 時間目の授業展開(指導案から抜粋)

生徒観

本校の第1学年は、体育授業に対して興味・関心が高く、体を動かすことが好きな学年である。そのため、これまでの体育授業では意欲的に活動する姿が見られた。また生徒のなかには、仲間に対して建設的な意見を出したり、リーダーとしてチームを引っ張ろうと積極的に声掛けを行うことができる生徒がおり、仲間と協力して活動する姿が見られた。

しかし新体力テストの結果から、体力面は決して高いとは言えない状況であり、多くの運動種目を経験していくなかで運動の技能とともに関連して高めていく必要があると考える。また、

- ・自ら考える
- ・互いに指摘
- ・教師からの助言

ルール・マナーを守ることや仲間の気持ちを考えて行動することなどに課題があるため、仲間との連携をねらいとする本単元を通して、生徒が心身ともに成長できるよう指導していきたい。

指導観

生徒はこれまでにバスケットボールを扱った経験が少ないため、ボールに慣れる運動やパス・ドリブル・シュートなどの基礎的な個人技能を習得するための学習に取り組んだ。中でも、バスケットボールは得点を競い合うボールゲームという特性から、シュート練習に多くの時間を割いてきた。また、ディフェンスよりもオフENSEの人数が多いアウトナンバーの練習を取り入れ、得点を取りやすい状況の中で学習を行うことにより多くの喜びを味わい、バスケットボールの楽しさに触れることができるようにした。さらに試合を通して課題を発見し、それを解決するための練習を主体的に行えるよう、学習カードを用いた話し合い活動によって生徒の思考を促し、チーム力の向上を目指した。

目標

○パス、ドリブル、シュートなどの基礎的な技術の習得とルールについての理解を図るとともに、少人数での攻防を楽しむ。(ねらい1)

○チームの課題解決のための練習を行い、より高まった力で試合を楽しむ。(ねらい2)

単元計画の随取

ね	1	い	ら	ね	段階 時数	学習内容	指導の主な
4				5	○オエニンション ○千ノ編成	○基礎的任務の習得 シフト・パス・ドリブル	・バスケットボールのゲームの特徴や習得の方向についての説明を行い、学習の見通しを持たせる。 ・そなわれ任務についてポイント頭示しながら、ゲーム感覚を促せる練習を取り組ませる。またシフトに関して、毎回の公開のシフトゲームを行い、技能の向上を目指す。
○千ノ編成 ○試合 ○課題解決のための練習 ※以下のようにな流れで学習を行う。	○少人数の攻防 1, 3対1 2, 4対2 攻撃有利 3, 3対2 4, 4対4 攻守同数						・攻撃準備目的について理解を、種々の攻防を行わせる。また、攻撃有利状況から攻守同数へと流れ学習を行うことにより、得点を取るその喜びを味わわせる。 ・少人数の攻防を行なうが、ルールについての指導を行い、理解させる。
							・毎回チーム目標を設定し、達成に向けて協力して学習を行っていく中で、千ノとしての意識を持たせる。 ・試合チームの課題把握させることで、

分	33	開 展	分	10	導 時	2	い	ら
○千ノ練習	○試合(4対2)	○試合の振り返りと千ノ課題の把握	○ウオートシグナツ	○準備体操 ○本時の目標設定	○集合、挨拶 ○課題の提示 ○本時の目標設定	86	本時 ○まとめ最終	
・課題を履ききるようチーム協力して練習を取り組ませる。	・安全配慮しながら、目標をもと練習を行わせる。 ・目標の達成度を振り返りから千ノの良い点や悪い点を考えさせ、課題把握させる。	・安直配慮しながら、目標をもと練習を行わせる。 ・チームと準備体操ウオートシグナツプを行い、団結力を高める。	・これまでの学習を踏まえ、本時の目標を立てるよう促す。 ・千ノと準備体操ウオートシグナツプを行い、団結力を高める。	・集合、挨拶 ・課題の提示 ・本時の目標設定	・集合、挨拶 ・課題の提示 ・本時の目標設定			り、練習の意識を高める。 ・練習を行った成果を明確にする中で、次時を予告する。 ・毎回の自己評価より、生徒主体的な練習律を高められるようとする。 ・本時を終えて、またとよい機会を今後の課題とてついでに目標設定を生徒の自発を見取る。
				学習活動	指導の主な			

ま	○予備の感寒明確にし記述させる
と	○目標
め	・目標を訂正することで、本時の習いにむけチームの活動振り返る
7	・公開シミュレーションを行い、シミュレーションの方向を把握。その際シミュレーションのポイントを意識するよう声掛けを行う。
分	

**成果と課題**

人間関係づくりに関して、1時間を通してチームで活動することや話し合い活動が効果的に働いた。学習カードにより、チームで活動を工夫しようとする姿が見られた。時間の使い方を工夫するべきだった。試合・観察・練習の3場面を確保し回すことが望ましい。より自チームに適する課題設定の方法（他者評価。樹形図による課題把握）課題解決方法の工夫（課題に応じた練習メニューの提示）

◆ 小学校三校から進学してくる（一年生三三名）ため、生徒指導上、人間関係づくりを主眼におき実施時期もあえて五月に実践。そのために、チームでの学習活動をベースに授業を構成している。技能面では球技の特質の一部でもあるシュートを中心に学習しオフエンスの人数を多くするアウトナンバーの練習も多く取り入れ、得点が入りやすいよう場面設定している。（3対1、4対2、3対2）また学習カードやチームでの話し

合い活動が効果的であった。

課題をより鮮明に意識させたり、客観的に分析するために、ゲーム記録（心電図や触球数等）をつけること、バスケットでの動きの意味が理解できるように「二人によるコンビネーション」をどう位置づけるかが話し合われた。

**2 「球技における体力差・習熟度の差をどう克服するか」 ～生徒一人ひとりがいきいきと取り組む**

**体育の授業をめざして**

猿払村立拓心中学校 佐藤 建

個人種目では比較的容易に体力・習熟度差に応じた授業作りができるが、球技においては難しいものがある。そこで、佐藤氏はバレーとバスケットで「ゆったりリーグ」（ゆっくりリーグ）を楽しむ。「ぱりぱりリーグ」（スピード感あるゲーム）に分け希望制で習熟度別（チーム）リーグを作る。

そこでボールに苦手意識を持っている生徒もゲームを楽しみ、一方では得意な生徒はより高いレベルで学習できる環境をつくっている。生徒の満足度は高く、特にゆったりリーグの生徒達が生き生きと活動していた。劣等感や仲間への遠慮が球技に対してマイナス思考に繋がっていたことを感じ、能力差ではなく

人間関係が大きいことがわかる。最終的にめざすものは、体力や技能の差を超えて仲間と球技を楽しむ姿勢。そして仲間と高めあえる集団の育成である。そこに行き着くまでのプロセスとして今回の取り組みを上手く活用したいとのことであった。一般的には、能力別編成と言う形態では教え合う姿が見られなかったり、学習内容や目標が異なるために球技ではタブー視される。しかし今回の取り組みは、そう言ったものと異なり生徒の実態や思い、仕組み方が異なっている。根底にあるのは生徒間の人間関係の改善の思いが見えてくる。学校である以上、学級や人間関係作りを重要視しなくてはならないし、そこにあえて取り組んだ実践としては興味深いものがあり、今後の発展を期待したい。さらに、リーグを工夫することで生徒は何を学んだかを押さえることが重要であろう。

### 3 「器械運動にはまっちゃえ〜!」

別海町立西春別小学校

米谷 豊彦

#### 1 器械運動は克服的スポーツか

なぜきらいになつていくの

体育で取り組む運動の好き嫌い調査をすると、好きな種目はボール運動と答える子ども達が多いのではないのでしょうか。器

械運動が好きと答える子はわずかだと思います。この傾向は高学年になるにしたがつてさらに顕著になることでしょう。器械運動には、マット、跳び箱、鉄棒の3つの教材があります。なぜこれらの種目が嫌いになつていくのでしょうか。その理由として、

(ア) 身体が痛い。(特に肥満傾向の子)

(イ) 逆さ感覚に乏しく、恐怖心がある。

(ウ) できる、できないがはっきりしているので、できないとかっこ悪い。

(エ) 1つ、2つの決められた技をできるまで反復練習させられる。

以上のことが考えられます。近年、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化し、幼少時の遊びが以前とは変わってきています。幼いうちからゲームを与えられ、友達と一緒にひっくり返ったり、転がったりしながら遊ぶ経験はほとんどなくなつてきている状況にあります。しかし、この理由の中で特に④については、教師側の指導に問題があると言えます。④が①〜③の要因をさらに煽っていると考えられないでしょうか。

何度も何度も、「逆上がり」に挑戦させる。跳べるまで「開脚とび」をさせる。器械運動は「努力」で、「根性」で克服することに美学を感じ、子どもの成長を結びつける種目なのではないか。

## 2 器械運動のおもしろさ

「気持ちいいー！」

鉄棒で、初めて「足かけ後転」ができた4年生の女子Jさんが叫びました。昨年、西春別小学校の3・4年生（複式12人）で鉄棒に取り組んだとき、私は子ども達に言いました。

『「こうもりふりおり」と『足かけ後転』この2つの技ができるのと、皆さんはこれからたくさんの技ができるようになります。そして鉄棒が最高に楽しくなります。だから、どうしたらこの技ができるのかを考え、友達と教え合いながら、まずはこの2つの技をできるようにしてください。』

最初の種目調査の結果、「こうもりふりおり」は12名中4名、「足かけ後転」は2名ができていたのでまずはその子達の演技を見せながら、なぜできるのか、何がポイントなのかを発見させました。子ども達が気づかないところは指導者の方から伝えました。12人の子ども達は次々にこの2つの技を獲得していききました。そして数日が過ぎ、最後に残ったのが4年生のJさんでした。同じグループの子ども達はJさんに「足かけ後転」のポイントを何度も教えていました。

「回転する瞬間に鉄棒を軸足のひざ裏にずらすこと」

「振り上げる足は頭の後ろにひざを持っていくこと」

「回転に入る前に顎を上げ、目線は上斜め45度にする事」

など。

そしてついに「その時」がやってきました。1本の鉄棒を軸に、左足ひざ裏を支点としたJさんの身体がぐるんと一回転したのです。その瞬間、彼女は叫びました。

「気持ちいいー！」

「Jちゃん、やったー！」

見ていたみんなも叫びました。そしてもう1回、2回。感覚をつかんだJさんはもう失敗することはありませんでした。できる喜びも当然あったと思いますが、彼女は何度も「気持ちいい！」を連発しました。回転するスリルと身体を自由にコントロールできる気持ちの良さ。1本の鉄棒を軸に身体で表現する楽しさを獲得したのです。

「鉄棒の練習はしなくていいからー！」

その後、グループ学習を中心に鉄棒学習を進め、一人5種目の個人連続技と、2人ペアによるチーム技に取り組みました。このころになると、「鉄棒やり過ぎ注意報」を発令。はじめの頃は、出来るようになりたくて一生懸命練習していた子ども達ですが、だんだんできるようになってくると、楽しくてしょうがないのです。やり過ぎた結果、手のマメがつぶれたり、ひざの裏に内出血を起こすことは明白ですから、

「鉄棒のやり過ぎ、練習のしすぎはダメです。」

と言っても休み時間になると、鉄棒に飛んで行ってしまいます。案の定、学級の子どもの半数近くが鉄棒に掛ける軸足のひざ裏近辺に内出血を起こしてしまいました。

「足を紫色にしてまで鉄棒の練習はしなくていいから！」

「ええ、でも鉄棒したい。」

「今日はやめなさい。」

「じゃあ、明日になったらやってもいいですか。」

これって依存症？すっかり鉄棒にはまってしまった子ども達でした。

そして、鉄棒の最後の授業である鉄棒発表会の日を迎えました。この発表会には保護者にも参観を呼びかけました。するとなんとほとんどの家庭からお母さん方を中心に、中にはおばあちゃんまで見に来てくれました。1年生と2年生の児童、職員室の先生方も見に来てくれました。3・4年生はまさかこんなにお客さんが来ると思っていませんから、皆驚きの表情です。ちよつと緊張したようですがみんな頑張りました。子ども達一人ひとりの演技に、観客席から大きな歓声が上がりました。発表会は大いに盛り上がりました。

（途中略）

### 3 子どもの指導ノウハウ

器械運動には、器械運動でしか味わうことのできない独特の

身体表現の楽しさがあります。器械運動に限らずどの運動にもその運動でしか味わうことのできない独特の楽しさ、それを私たち「学校体育研究同志会」では「運動の特質」と言っています。その楽しさを中心に、運動の基礎となる技術（基礎技術）は何なのか、そしてそれはどのような順序で発展していく（技術の系統性）のか、ということを考えながら授業を作っています。

#### （1）器械運動の特質と基礎技術

	独特のものさし得意	基礎技術
マット運動	マット上で、回転バランスを身体で表現し、単技、ジャンプを片側転で終わるのではなく、自らの技能を連続し演技、ホップ側転すると連続技の創出	
鉄棒運動	一本の鉄棒を念として、その空間、振り回転、宙吊り、足をかけ回転、宙表現など、連続技の創作とその演技	
跳び箱運動	助走、踏み切り、着かす手のつきはなし、着地を膝、腕、横びつきの発問バランスのメルゲイナミックスを追求表現、横びつて現するも	はねたび

従って、「逆上がり」や「開脚跳び」の単一種目にこだわる指導は器械運動の楽しさや発展を阻害する恐れがあると考えています。

#### （2）グループ学習

学習集団の質が高まれば、子ども達の学習内容の質が飛躍的

に高まると考えています。集団の質とは子どもたち同士の関わりができるということですが、これまでの学習指導要領では、「自己の能力に適した課題を持つて技に取り組んだり、できるようにしたりする」といういわゆる「めあて学習」が前面に示されていました。しかし今学習指導要領では、そういった記述は残されている一方で「言語活動」を強調しています。子ども達も他者や社会とかかわる上で必要な力をはぐくむ活動として押さえているようです。学習指導要領に言語活動の充実をうたっているからというわけではありませんが、子ども達がコミュニケーションをとり、教え合い、学び合いが成立するためには、まずは小集団であるグループ（異質グループ）での活動が有効であると思います。特にマット運動や鉄棒運動では、集団演技に取り組むことによつて、さらに子ども達のかかわりが強まってくるのではないのでしょうか。

### （3）準備運動は「ねこちゃん体操」

「ねこちゃん体操、いつてみよう〜！」

「にゃおくん！」

私が呼びかけると、子ども達は「ねこちゃん」になって応えてくれます。器械運動に取り組んでいる時は、「ねこちゃん体操」が準備運動となります。「ねこちゃん体操」とは1999年に、

当時、埼玉の山内基広先生が子ども達と一緒に考案した体操だそうです。山内先生は器械運動に最も大切な共通感覚は、「あふり」と「はね」動作による重心移動感覚と身体操作であるという仮説を立てました。そしてそれまでの経験から、「あふり」「はね」「しめ」「ひねり」の感覚と身体操作を抽出して創り出したのが「ねこちゃん体操」だということです。

はじめは、見よう見まねで取り組んでみましたが、けっこう高度な体操なのです。しかし続けていくうちに子ども達の身体の使い方や動きや変わってきました。特に有効と感じたのは「ブリッジ」からの「足上げブリッジ」です。子ども達の身体がほとんど反れるようになってきたのです。

「ああ、わかった！先生、足上げの時は支える足が真ん中になるようにするとできるんですよ。」

と教えてくれたのはアスペルガーのS君。

「じゃあ、グループの友達に教えてあげてね。」

と言うと、それを聞いて「足上げブリッジ」ができるようになったYさんは、さっそく「わかったこと」を体育ノートに記述していました。そしてきれいなブリッジができるようになってきた子ども達は、倒立の状態からのブリッジ、立った状態から後ろへ反つてのブリッジなどバリエーションが広がってきました

た。それは間違いなく、やがてハンドスプリングやバック転へつながる感覚であると確信しました。

#### （４）体育ノート

子ども達には「体育ノート」を持たせています。器械運動の時だけではなく、「水泳学習」や「ボール運動」の時ももちろん書きます。子ども達はどうすればその技や運動ができるようになるのか、考えながら学習してほしいからです。

記述することによって、子ども達は、

- ・何がわからないのか
- ・何ができないのか
- ・何がわかったから、できたのか
- ・友達との関わりはどうだったのか

ということとを交流し合ったり、指導者として押さえておくことができます。特に技のポイントを見つけた時はグループでの交流、そして全体での交流に生かしていくことができます。

ポイントをすべて教師が言っていて、子ども達に「やらせれば」早く出来るようになるかもしれません。しかしそれが体育の学力かという点と違うのではないかと。時にはゆっくり「子どもたち同士のかかわりの中で主体的に」獲得した技術こそ本物ではないかと思うのです。かつて先輩教師が言った「大事なことは教えない」という意味がわかるまでにずいぶん時間がかかりまし

た。

他の教科も同じです。教師が子どもにも考えさせずにすぐにポイントを教え、トレーニングによって目先の学力テストの点数をアップさせることが学力だとは到底思えないのです。

◆鉄棒とマットを中心に実践。器械運動は克服種目では決しないし、できた喜びは生涯続いていく。運動の持つ特質や基礎技術をおさえること、異質グループによるグループ学習での学び、ねこちゃん体操や体育ノートによる学びを作ることが報告された。細かな指導と確かな力をつけさせている実践である。

## 4 「体力づくり『ハッスルタイム』」

礼文町立神崎小学校 藪谷 武範

### ◎ はじめに

私は、故郷である最北の島「礼文島」の小学校で、期限付きとして勤務をしています。全校児童は六名で、一年生男子二名、三年生女子一名、四年生男子一名、五年生男子一名、六年生女子一名です。児童数が少ないために、体育の授業は、基本的に中高学年と一年生に分かれて行っています。なので、団体競技は満足にできませんし、個人競技でも、それぞれ学年が違いため、色々とやりにくさがあります。

また、体力テストの結果では、全種目全道平均を下回っている児童がいたり、持久力、走力、跳力、柔軟性に関しては、ほとんどの児童が全道平均以下となっています。そのため、神崎小学校では、体育の時間以外でも、体力の向上を目指しています。

◎ 体力作り活動「ハッスルタイム」

この「ハッスルタイム」は、平成23年度に始まった取り組みで、体力テストの結果から、体力の劣っている項目を向上させようという活動です。

1、ねらい

- ・「持久力」・「跳力」・「瞬発力」の向上を図る。
- ・年間を通して取り組み、体力の向上を図る。
- ・自ら目標設定を明確に持つことで、意欲の向上を図る。
- ・今年度の体力テストの結果から、「柔軟性」を伸ばす運動は、この時間では難しいため、体育の授業の中で取り組む。

これら四つのねらいのもと、毎日中休みの最初に、五分間体力向上のための運動を行います。毎月初めには目標設定をし、毎回目標達成ができたかどうかを記録していき、月末に反省をします。という流れになっています。

また、意欲向上のため、月末に特に頑張った児童を「ハッスルMVP」として、紹介をして名前を体育館後ろに掲示します。

2、種目について

一輪車	日曜日	マラソン	火曜日	縄跳び	水曜日	サーキット走	木曜日	自由選択	金曜日
-----	-----	------	-----	-----	-----	--------	-----	------	-----

○一輪車

体育館を「く周する」や「五分間乗り続ける」などの目標を決め、体育館の周りを走ります。これは、バランス感覚や体幹を鍛えることを目指します。速い児童では、25周します。だいたい1000m一輪車で走ったこととなります。

○マラソン

五分間走です。「く周する」など、具体的な数字を目標として、少しでも多く走ります。全身持久力向上を目指します。速い児童では、23周します。だいたい900m走ったこととなります。

○縄跳び

基本的には普通跳びをします。「く回跳ぶ」や「く回以上引つかからない」などの目標を立てて跳びます。全身持久力や跳力、瞬発力の向上を目指します。

○サーキット走

体育館一周をミニハードルダッシュ、サイドステップ、ジャ

ンプ、ラダーをします。これも、「く周」するなどの目標を立てて走ります。全身持久力や瞬発力、跳力などの全体的な体力を向上させることを目指します。

### ○自由選択

自分の中で、頑張りたい種目を選んで行います。ただし、サーキット走を行うと、他の種目ができなくなるので、サーキット走以外の三種目から選択をして、週末を締めくくります。

### ◎課題

持久力の向上については、少しずつ成果はできているようです。しかし、跳力に関しては、縄跳びやサーキット走の取り組みだけでは、向上はあまり見られないことと、走力を向上させるための効率的なメニューがなかなか設定できないという課題があります。もちろん、ハッスルタイム以外の体育や遊びの時間などでの体力向上も行っていますが、五分間のハッスルタイムの中で、様々な体力の向上を目指すための、メニューの改善を考えていかなければならないと思います。

◆ 体力テストで劣っている項目の向上めざして全校で取り組んでいる報告。中休みの五分間を一輪車・マラソン・縄跳び・サーキット走・自由選択と曜日毎に変えて行う。目標を持たせ、より向上した。楽しく取り組んできている。統廃合のためスクールバスになって肥満傾向も増加している。小規模校で皆で楽しく取り組み成果を上げてきている。内容の工夫や体育文化の生活化で、より主体的になるであろう。目先の数値にこだわ

のではなく、結果としての体力向上をめざしたい。

## 5 「創作ダンスを通して」

厚沢部町立鶉中学校 池田 優介

初めて創作ダンスに取り組んでの悩みや展開の改善を模索中の発表である。氏の願いは「自分を表現する・人に伝える」ことから楽しさを感じてもらいたいと考えていた。ただ、完成形がわからず試行錯誤を重ねた。創作にこだわらず模倣や変身、現代リズムダンス、民舞やヨサコイを行っているところが多い。改善としては、プチ発表に慣れさせる。「形」を動かしてストーリーを創るのも一方策であろう。

## 6 「やっぱりドルヒラ〜大規模校の水泳〜」

中標津町立中標津東小学校 中島義夫

### 3回だけ！(水泳事情)

中標津町には温水プールが1つあるだけである。そこへ町内の学校が水泳教室を行うので夏場は非常に混雑している状況。担任している2年生では、8月末に1度と9月に2度、計3回の水泳教室を実施した。学校は市街校なので、プールに行くと思えば自由に行けなくはない。しかし校区的には離れてい

るので2年生が子どもだけで行くには無理かも知れない。よっぽど好きな子や水泳教室に通っている子以外は、市街校と言えど年3回の水泳教室だけで終わる子がほとんどである。

#### 大規模校の実際

前任の小規模校では、好きだけプールを使い、効果も上がり、ほとんどの子が100M以上を泳げるようになっていた。

しかし、大規模校では様々な問題がある。

第一に、系統的な指導が難しいこと。我々はドルヒラからの指導が一番であると思っけていても、学校全体では難しい点である。ドルヒラをわからないという事とわからなくてもいいと思っけている。水泳指導に熱意を持っけていないし、バタ足をやらせ、クロールのなことをやらせしておけばいいとしか感じない。新しく「ドルヒラの指導法」を覚えようとは思わないのである。同志会で実技研修を呼びかけても参加はいない状況。それだけ忙しいのも確かである。水泳の研修の前に、他の仕事が優先されるのである。それも、ある意味理解出来る。体育の、しかも水泳の位置づけはその程度なのであろう。水泳の指導が嫌だと言う声も聞こえる。と、言うことは水泳指導に困難を抱えているということでもあるのだが・・・。

#### つぎあひびつ（環境）

2年生なので小プール（15m x 10m）を使い、そこに9名が入るといふ、いも洗い状態。それを担任3名で教えるという状況である。低学年なので、グループ学習や個人学習も難しく、指導に困難を抱えている。

#### もつとできたかも・今年度の水泳学習

昨年（1年生）から呼吸と脱力を意識して指導にあたってきた。学年教師団も理解良く同一歩調で指導にあたっている。低学年では、水慣れ水遊びが中心なのだが、水慣れができてくればドルヒラに進めようと考えていた。

今年、教師団の打ち合わせで大まかな指導法を確かめた。実際にプールに行ければよいのだが、そこまでの時間もない。（声をかければ可能だったかとも思っけているが）

#### おさとして、

- ・顔をつけられない子以外は、能力別GPを作らずに学級として学習する。実際にはプールの大きさや指導者の不足で小GPも作れない。
- ・バタ足はさせない。

子どもはまだまっけていると必ずバタバタしてくる。脱力と推進力を奪うため。

・呼吸を確かにさせる。

陸上よりも実際に入ってやること。つまりいたら、また戻ること。

・浮きを確実にさせること。

バタ足で浮くのではなく、力をぬいて浮けるようになることを重視。

・教師一人では大変なので、子ども達はバディを組ませる。お互いに教え合ったり補助し合ったり、ふざけて遊ぶことをさせないためにも（実際は話を聞かないで遊ぶ子が出てくるので）

**こんな流れで（指導計画）**

①オリエンテーション 呼吸の仕方 力の抜き方 ドルヒラのビデオ視聴

②水遊びと浮きを中心に 壁での呼吸、顔を出したら呼吸

③伏し浮きから呼吸1回で立つ 手のかきかた（手の協応）

④ドルフィンキックから浮いて呼吸（足との協応）

⑤ドルヒラ1回〜3回

⑥ドルヒラで呼吸回数を増やす

計3回（1回は実質75分程度） トータル3時間45分ほど

**できた！（結果）**

計	3組	2組	1組	
11%	5	3	3	めたか
4%	2	1	1	浮けない
8%	5		3	浮ける
26%	9	8	7	呼吸1回
25%	8	10	6	〜5回
4%		2	2	〜10回
21%	3	7	10	15m

\*呼吸が数回できるようになった子が約半分である。

\*浮けるけど呼吸する泳法までには至っていないのを「浮ける」8%とした。

\*ドルヒラとして、泳法を覚え取り組めるようになった子は8割。

\*スイミング（短期も含む）に行っている子もいるのだが、相關関係はなかった。

**ん〜（成果と課題）**

水慣れがクリアできたら、基礎泳法としてのドルヒラはやはり有効な指導法であることがわかった。大規模校でスペースや指導者、そして時間が少ない中でもこれだけの成果をあげられ

ることはドルヒラの持つ価値が高いと言える。

スイミングに通っている子も多くいるが、ほとんど呼吸は習っていない。中には浮けない子もいた。スイミングではビート板につかまってバタ足をしているだけという内容も聞く。

今まで、大規模校では中々ドルヒラの実践がなされてこなかった。私も小規模では大きな成果をあげてきたが、大規模校では高学年でグループ学習の中で実践した程度である。なにより学年間の系統性がないことがネックとなっている。

今回は低学年でも一定の成果を得られることがわかった。

そのためには、

○教師団の共通理解と指導系統を確立すること。

○子ども自信の見通しを持たせること。(どんな泳ぎでどんな

練習をするか)

○互いに教えられるバディやグループピングを工夫する。

今回も、子ども同士でいろいろな声かけがなされていた。

課題としては、

◆より早い段階で水慣れさせたい。(家庭や幼稚園、1年生で)

◆教師団の、さらなる研修(指導法)

◆学年間の系統的指導(学校として)

せつかくドルヒラでできたことを積み上げるためにも。

## わすじ

本校に来て4年目。官制研に熱心な研究校で有名で、不夜城

のごとく12時からいまで電気がついていたことも聞く。しかし、今はメンバーも変わり組織構成も変わってきたせいか、民主的な学校へと変わりつつある。ドルヒラへの抵抗も感じないし、最近では校内研修でフラフトの講習も依頼された。教育課程への共通理解は難しいが、少しずつ伝えていきたいと思っている。気力体力を振り絞るのはしんどいが・・

## 7 器械運動の学習風景(映像)……題名のみ紹介

札幌学院大学 大瀬 隆

## 三、まとめと課題

レポート数が六本と多く、内容も幅広く充実した分科会であった。その教材で「何をどのように学ばせるか。」教師が見据えることを今一度確認させられた。さらに教材(運動文化)の核を押さえつつ、児童生徒が自主的積極的に学ぶための展開を工夫することも求められる。また、中学高校での生徒指導や人間関係を教科指導とどうリンクさせて授業を作り上げるかも報告が多く学んだ年であった。今年も小中高大と研究を深められた。さらなる積み上げを期待したい。

(中標津町立中標津東小)